

田辺聖子

わが敵

MY ENEMY

わが敵 MY
ENEMY

田辺聖子



徳間書店

わが敵 MY ENEMY

© 1967

定価 450 円

昭和 42 年 10 月 15 日発行

著 者／田辺聖子

発行者／徳間康快

発行所／株式会社 徳間書店

東京都港区新橋 4 の 10 の 1

TEL／434—6191 振替／東京 44392

印 刷／大日本印刷

製 本／大日製本

——乱丁、落丁がありましたらおとりかえいたします——

目次

わが敵（マイ・エネミー） 5

うたかた 127

おんな商売 165

女運長久 183

あとがき 236

カ
バ
ー
装
幀
長
尾
み
の
る

わ
が
敵

M
Y

E
N
E
M
Y

わが敵 〈マイ・エネミー〉

にがみ歩いてる男のこと

パーティーの主催者はぐるツと見渡してみても、みんなきげんよくやっているようなので、満足した。ただ、一人だけ、背の高い青年がつまらなさそうに片隅で飲んでいるのをみつけた。

また対角線の片隅に、白いドレスを着て、黄金ずくめの持ち物の女が、これまた、会場の誰とも話を交さずにボンヤリと、酒をすすっているのをみつけた。

そこで、青年を彼女の所へつれていった。

そして紹介したけれども、室内の喧騒のせいとか、主催者の女性が酔っぱらっているせいとか、それとも紹介された方が酔っぱらっていたせいとか、名前も何も聞こえなかった。

でも、誰もそんなことは問題にしていなかった。

男も女も、名前なんか知りたいとは、これっぽっちも思っていないかった。二時間ばかり、酒を飲める相手が出来ればよいのだった。

主催者の女性は絵かきで、このほどある画廊で個展をひらいて好評だったので、自分で奔走して

「黒松のぶ子をはげます会」をつくり、批評家や絵かきやその他の有象無象を招待したのである。

彼女はコネのあるバー「金の靴」を会場に借り、四囲の壁には、彼女の絵をかけた。『記憶』という題がどれにもついていた。それは何とも言いようのない絵だった。小さいのも大きいのもあったが、いずれも画題は女の子宮や骨盤や、そしてつと直接的な部分としか思えない形を、いく通りにも組み合わせたものばかりだった。

彼女はまた、壁に、新聞や雑誌から抜粋したほめ言葉をパンフレットに刷ったものを貼っていた。

「黒松のぶ子はユニークな色をもっている」

「黒松のぶ子は若さのほとばしる美しい画面に仕上げた」

「リズム感あふれる画面」

「女性らしいデリケートな、タッチ」

悪いのはちつともなかった。

青年が、のぶ子に何か言った。

彼の骨ばった、ほそい指は、高価な舶来ライターをもてあそんでいた。

青年はほめられている黒松のぶ子にお愛想を言ったのかもしれない。

「あんな批評家——」

のぶ子は鼻で笑った。

「向うに来てるけどね。ほんとは厭なやつよ。フランス女と結婚して子供にフランス名をつけたことを唯一の自慢にしてんの」

彼女は鶏骨^{がら}みたいたいに瘦せて、悪魔の耳みたいな眼鏡をかけ、高価な服をだらしなく着ていた。指か

ら煙草を放したことがなく、髪のは尻まで垂れていた。

のぶ子がいつてしまうと青年は白い服の女をいそいで一べつした。

ムッチリ肥った女で、それでも脚はびっくりするほどきれいで、立ったらかなり背は高そうだった。二十七、八ぐらいで、雪白のドレスは袖なしだった。持っている小さいバッグからネックレスから靴に至るまで金色で、けれども、いやな趣味ではなかった。かなり、いい感じのする女だった。ただ退屈そうだった。

女のほうは青年を見て、自分より少し上ぐらいの年かもしれないと思った。インディアンみたいな幅広い、がっしりした肩で、背が高く、動きの早そうな足と腕力のありそうな腕をもっている。

うすいブルーのワイシャツで、外は暑いけれどもここは冷房が利いているので、きっちり上衣を着こんでいた。

たかい頬骨、それに輝きのある、不逞な凶々しい目付きをしていた。

にがみ走っているときまではいかにないが、にがみ歩いてるぐらいの色男である。

彼女は観察力の鋭さをかくすようににっこりしたら、にがみ歩いてる青年も観察していたとみえ、にっこりした。

そしていそいで、

「ここへ坐ったら、あきまへんか」

と開達な大阪弁をしゃべった。力があってわりかし、いい声である。商人風である。

「どこを開けますの？」

と彼女がいうと、

「あなた、わりあいイケズですなあ、いやらしい」

と、青年は椅子を引いて坐った。

「何も言いません。……あたし」

彼女はいそいで赤くなつて弁解した。

「あれこれ、かけ引きしてしゃべるの、きらい。あたしのモットーは策略をもてあそばぬ、ということ。だから恋もしないの」

「はあ」

「あたしの主人は“色ごととは奸策の最たるものや”といつもいうんですの」

「なるほど」

青年は水割りをすすっていた。

「主人はいろんなコトワザや格言が大好きですけど、へんな所もあつて、オギノ式のことをハギノ式といひはつて聞きませんのよ」

「どっちでもよろしおまつしやる」

「それはかまいませんけど」

青年は彼女にもグラスをとつてくれた。そのしぐさは、上品とまではいかないまでも、下品ではなかつた。

「この画は何ですかしら」

と彼女は青年に頭上の黒松のぶ子の画を示した。

「蝶々……」

青年は首をめぐらせて、あやふやにいった。

「骨盤ですよ、女の」

彼女は、断固として言った。

「ハサミや」

と青年は叫んだ。女はしとやかにたしなめ、

「それは大腿骨やわ」

二人はしばし、眼をこらして画中から別の人物や動物をさがす宝さがしのように考えた。

「蝶々のようでもあるわ」

と女はあきらめたようにいった。

「骨盤らしいかもしれん」

と青年はややこしくいった。

「けど、下品な色ですな」

「そうね、何んやこう、エロチックやわ。赤いところが、いや味ですわ」

ところが青年のしている画には、赤は一滴もなかった。彼は自分が色盲ではないかと疑った。

「このグリーンが淫蕩な色なんですぜ」

青年はふしんそうにいった。そこではじめて、二人はべつべつの絵について論争していたことに気付いた。でも、もうあらためて、おたがいの見た絵について意見を交換する根気はなかった。こんどは、下品ということについて考えた。

彼女はいまは卓に、白いムチムチした肘をつけて、しゃべっていた。可愛らしい声である。

「あたしの主人いうたら、いつもズボンをぬぐとき、そのままズボンをぬいだままの形におかないと、怒りますの」

「はあ」

「田錐形にもり上った火山のてっぺんに、火口が二つ並んだようになってますねん」

「なるほど」

「はくときはその二つの穴へ足をつっこんではいて、これぞ時間の節約なり、と大見得を切りたがりますの」

「そらそやわ、ね」

「そういうの、下品やというんですけど」

女はちよつとまた、唇を酒でしめしてから、考えて、

「それにあたしが時に、Mやねんといえますとね、主人いうたら片方の手で、げんこつを作って片方のてのひらに打ちつけながら、”親方日の丸かア”というんですけど、あれどういう意味やろ」

「さあ」

「どうかと思いますねん、それも」

「お宅のご主人は何のご商売でつか」

青年も卓に肘をつけて、グラスを支えた。そうした方が、女とちかぢかと顔を合わせられるからである。

近くでみると、たいへん美しい女だということがわかった。とくに、眼の形と、唇の形がえもいえず美しかった。彼女は酒が廻ったとみえて、いまは、ピンクの豚の豚のようになっていた。人のいい、一寸

ぬけた女に思われた。

「あててごらんなさい」

「市会議員」

と青年は出まかせを言った。女はすぐ、

「当った」

といった。けれども笑い出したので、ほんとうは当たっていないことを思わせた。

八百屋、といつても当った、というかもしれないことを、思わせた。

二人は話がとぎれたので、酒をすすった。退屈のようでもあり、ようでもなく、青年はじつとその席を動かさず口もひらかずにいた。

自分が退屈しているのかどうか、わからないけれど、この女の前にいるのは、そんなにいやではなかった。

女がべちゃくちゃしゃべらないのがよかった。

でもこの女なら、もつとしゃべっても、いや味でない気がする。

室の斜めうしろは、ガラスの一枚板をへだてて中庭があり、雲形定規の恰好の池があり、五色の噴水が上っていた。噴水が青い水になると彼女の顔は青くなり、赤い水になると赤く映えた。

青年は、自分が退屈することに神経過敏になっていたが、でもいまはまだ退屈してないのだと思ひこもうとしていた。しまいに何が何やら、酔っぱらった頭ではわからなくなり、退屈をおそれる、こわがる必要は、少なくとも、いまはないんだと思つた。

すると目の前の彼女に好意がもてた。

「こんどは奥さまの話をしましょう」

ピンクの豚のような彼女は笑いながらいった。笑うと、唇が酒で濡れているので、淫蕩な感じがした。それもよかった。

彼は咳払いした。

「一人います、これが……」

勿体ぶって、

「えらい、別嬪」

「でしょうね……女優さんでいうたら、どんな人に似たタイプの方ですか？」

「比較を絶してます」

「では、ありましようけど、強いて」

「まあまあ、もうよろし。オタクは、お子さんはどうですか」

「二人ですわ。女と男」

「ウチは二人、いや三人」

「おいくつ？」

「十五……かな」

「えっ」

「いや、これは兄貴の子でした。ウチは三つに一つ」

「三人とおっしゃったのは……」

「あっ」

青年は酒杯を唇から放し、

「あとしばらくしたら、です」

「ああ。幸福なのね」

「ええかげんなこつてすわ」

「女の子、男の子？」

「男、どっちも」

女はだまつていて、しばらくしてから、

「でも、子供って……かわいいもんですわねえ」

「そら、可愛いもんだす」

話がとぎれたので、二人は酒をのんだ。

音楽が流れていたのので、二人は耳を傾けた。チヨカチヨカした曲である。

「何ていうのかしら」

と女は呟いた。

「『星ふる夜の思い出』ですがな」

青年は教えた。それから、便乗してすぐ、

「おうちは？」

「あります」

「そら分つてまっしやないか、どこですねん？」

青年は煙草の煙を吐きながらいった。

「よろしかったら、車で来てますからお送りしよう、思うて。あきまへんか。宜しやろ」

「ああ、よろしいのよ、そんなこと」

「ご主人が怖いんですか？」

「あほらしい——でも、かなり、うるさいほうじゃありますわ。若いころはよくお尻を叩かれましたの。外出から帰るたび」

「かわった趣味がありますな」

「主人はいつもいます。女なんて西瓜と同じや、けつ叩いたら大体わかる”ってね。あたしが浮気したか、せなんだか……」

「へえ」

「五へんに一ぺんはあたりましたわ」

やっど青年は、わかった。

ここまで来てわかった。

あんまりぬけた女ではない。彼を噛んでふり廻して喜んでいるらしい。

さつきから彼がウソばかり言っているのを知っていて、彼女の方も、ウソばかりならべていたのかもしれない。コン畜生。

まわりでは席ががらあきになって、何うしたのかと思うと、まん中のフロアへ出て、みんな踊っているのである。

「ひとつ、ホンマごっこ、をやりまへんか」

と青年は、現役の商人らしい、さわやかな舌さばきでいって、よりちかちかと彼女に近づいた。